陸上運動の指導に関する研究
—陸上運動に対する教師及び児童の認識とその指導—

秋 吉 嘉 範 (福岡教育大学)

A Study of Instruction in Track and Field
— Teacher's and Schoolchildren's Understanding of Track and Field, and Its Instruction —

Yoshinori AKIYOSHI

Fukuoka University of Education
Akama, Munakata-shi
Fukuoka, (811-41)

Abstract

In physical education in elementary school track and field is included in the program components. However for schoolchildren, this teaching material should not be utilized just as a play or a kind of physical activity. The teacher's responsibility and role is to categorize track and field as it is.

Track and field requires several skill-values (characteristics), e.g., run fast, jump long and high, throw far, etc. Since these required skill-values are close to basic motor skills, and simple form of body movement, schoolchildren who have poor physical power and skill tend to lose their interest in track and field. Therefore it is required that the teacher should recognize these factors and try to motivate them to keep their interest in this activity.

It sometimes happens that the teacher changes the learning contents according to his personal interest in track and field. In other words, he may change objectives, teaching materials, skill components, teaching methods, and time distribution. As the result of this, the teacher tends to fail to motivate the schoolchildren to have interest and enjoyment in track and field since the class is managed to meet the teacher's interest not schoolchildren's one. Thus the teacher should prepare teaching program based on the schoolchildren's physical power, skill level, interest in this activity.

When track and field is adopted as a teaching material, the followings are required for the teacher :

1. To recognize and grasp the standard of the grade and the class.
2. To realize and recognize each schoolchild's physical power and skill characteristics in track and field.
3. To understand and recognize the schoolchildren's attitude based on daily classes and learning process toward physical activity problems.
4. To adopt playful factors into learning processes and lead schoolchildren to experience true satisfaction, enjoyment, strictness in play since track and field in elementary program is the fundamental stage which leads to competitive track and field.
5. To inspire competitive mind in schoolchildren through running, jump, etc. with classmates.
6. To demonstrate running, jump, etc. with schoolchildren in the process of learning, and be friends with them.
7. To understand each schoolchild objectively and recognize their relationships.
8. To ask some schoolchildren to demonstrate and add verbal instruction if the teacher can not demonstrate. In this case slides or videos are useful.

It seems that for making meaningful instruction, understanding of the schoolchildren's mind and bodies, and mutual appreciation between the teacher and them are required. Also it is necessary for the teacher to instruct the schoolchildren with his deep understanding of track and field in order to make the learning effective.

1. 研究の動機

1) 基本的原則から

運動の基本となる走, 跳, (投)は, 陸上運動の中心をなし, 小学校の児童はこれを教材として, 教師の指導に基づき学習している。それゆえに, 教師が陸上運動を教材として, どのように位置づけし, 認識しているかは, 指導上重要な問題である。教師は教材としての陸上運動の目標を計画し, 学習活動を指導, 評価する一方, 児童の陸上運動に対する興味や関心も調べ, また, 学習に対する欲求や意見を聞いて参考にしていであろう。教師が児童一人ひとりの運動認識を把握して, 学習指導するのは当然のことである。

しかし, 現実には教師が一方的に計画し, 児童は教師の指導どおりに, 陸上運動を学習することが多い。そのため児童の学習欲求が, 反映されないまま陸上運動の学習が進行する。そのような場合, 例え教師が学習指導に満足しても, 児童に不

満が残れば, 今後の陸上運動 (または陸上競技) の学習に影響があると考えられる。なぜならば筆者らの調査によると, 小学校時代に経験し, 好きになったスポーツ種目を, 中学校, 高校, 大学へ継続し, 実践する場合が多くみられるからである。

以上のことから考えると, 陸上運動に対する教師の認識と, 児童の認識が一致することが望ましい。そのための学習計画, 指導方法が検討されるべきであろう。

2) 実態から

筆者は教員養成大学で陸上競技専門の授業を担当して18年になる。昭和55年施行の文部省学習指導要領では, 陸上運動の内容が量的に減少しているが, それ以前 (昭和43年施行) の学習指導要領では, 陸上運動の領域や内容が現行要領より豊富であった。そのカリキュラムで教育を受けた学生 (小学校専修男女約34名) を対象に実態を明らかにする。

① 走り方

授業の最初の時間に学生を走らせると、まず上手に走れない。「腕を曲げて前後に振り、ももを上げて走ること」は、小学校4年の学習指導要領の陸上運動、短距離走に取りあげられている。小学校5、6年以降中学校や高校でも、学生は短距離走の指導を受けているはずである。しかし、上手に走れる学生は約30%、あとはまさに走り下手、最初から指導しなおしである。小学校の体育専修学生であるからには、走ることは少々得意であること、また、速くなくても、上手に走る練習をしている学生が、多いと考えるのはごく普通の論理である。しかし、現実には通用しない。

② スタート法

クラウチング・スタートは、小学校5、6年の学習指導要領にのっていたのである。ところが学生はスタートラインの、どこに手をついてよいのかわからない。いわんや足の位置ともなると、ばらばらである。一体クラウチング・スタートの方法を学習したのであろうが、具体的内容となると、認知していない(忘却した)学生が大半である。

③ 持久走

持久走の場合、自己のペースを知り、それを守って走ることが、小学校6年の学習指導要領にあった。ところが、毎年持久走(約5km)を実施すると、学生の5～6名はペースを守れずに途中でたおれるかやめる。同じ学習指導要領に「競争では、遅れても途中でやめないで最後まで走り通すこと」とあった。小学校時代、教師にどんな指導を受けたのか、どんな学習をしてきたのか疑問が残る。

④ 跳躍

走り幅とびの反りとびは、小学校5年の教材にでている。しかし、反りとびが上手にできる学生は統計的にみても約30%、あとは反りとびを認知していないし、認知していても実際はそのフォームでとべない。

走り高とびの正面とびは、小学校6年の指導教材にでていた。ところが、学生のとびフォームはさまざま、背面とび、ロールオーバーに似たとび方、また、ゴムとび形式のはさみとびなどが中心である。正面とびができる学生は約20%である。

以上が大学生の陸上競技授業の実態である。その原因と考えられるのは、1) 小学校時代から高校までの間、満足な陸上運動(競技)の指導を受けていない、2) 指導内容に片寄りがあり、学習指導要領に示されている内容が満たされていなかった、3) 学生たちが指導内容や実技を忘却した、などが考えられる。

昭和55年施行の小学校学習指導要領で、陸上運動の教材としての取りあげ方が、量的に減少しているだけに、教師の陸上運動に対する学習指導能力を、高める研究が必要である。

2. 研究目的

① 授業としての陸上運動の学習目標や、指導内容の認識を、教師の立場から明らかにする。② 陸上運動に対する教師の認識が、児童にどのように受け入れられているかを明らかにする。③ 教師の陸上運動の認識と、児童の陸上運動の認識をふまえて、指導方法を検討する。

3. 研究方法

1) 方法

教師8名に対しては、質問紙法と面接法を用いて実施した。学生(教育実習直後の小学校専修生)及び児童には、自由記述形式で、陸上運動の走、跳の学習目標、内容、指導方法などを記述させたものを資料とする。なお、小学校の陸上運動の授業参観及び観察評価査定を同時に実施した。

2) 対象

- (1) 宗像市内小学校5、6年生8クラス(教師8名)児童208名
- (2) 福岡教育大学小学校専修3年生71名

3) 時期

昭和59年10月～12月

4. 結果と考察

1) 教師の陸上運動に対する認識

調査対象とした教師8名は、男女とも20代、30代、40代、50代各1名である。このうち大学時代、体育サークルに所属していたもの2名、体育専攻は1名である。教師たちは相対的に体育・スポーツには好意的である。しかし、大学時代から現在までスポーツ実践経験が少なく、スポーツはあまり上手でないものが4名いる。

以後、男性教師20代をA、30代をB、40代をC、50代をDと呼ぶ。また、女性教師20代をE、30代をF、40代をG、50代をHと呼ぶことにする。

① 陸上運動の直観像

教師の陸上運動に対するインスピレーション(直観像)を尋ねた結果は、(1)ジョギング(2)オリンピック、(3)かけっこ、(4)女子マラソン、(5)運動会、(6)リレー、(7)ゴムとび、(8)速い遅い、という内容である。この回答から教師の陸上運動に対する基本的な認識の輪郭を把握することができる。すなわち、陸上運動は人間本来の基本的能力の走、跳、(投)が主たる構成要素であること、人間生活と直結する運動であること、また、陸上競技へと発展し、世界最高の大会であるオリンピックを連想させることなど、陸上運動の特性を教師は効果的に認識している。

② 教師個人の陸上運動に対する姿勢と認識についての事例研究

A教諭： 大学時代は文化サークルに所属していた。スポーツは好きだけれど、得意とはいえない。とくに、走ることが苦手で運動会などでの競争は、最下位またはそれに近い成績であったという。それだけに走運動に対するコンプレックスを持っている。また、走り幅とびや走り高とびも、体重が重いために跳躍力が不足して、うまくとべない。しかしフォームはなんとかできる程度である。A教諭は小学校に勤務しはじめて3年目、自分自身実技が上手にできないだけ陸上運動(陸上競技と区別がつかない)に対するあこがれがある。しかし、具体的実践や指導方法をまだ把握していないという。

B教諭： 大学時代、体育サークルに所属、サッ

カー選手として活躍、小学校勤務10年、スポーツ好きであり、どんな種目でも適当に、そして上手にこなせる万能タイプ。学校では体育主任として、教師の教科指導や体育行事の企画運営、指導に当たっている。大学時代地区大会で優勝経験がある。体育・スポーツに対する要求水準が高い。体育授業を厳しく指導し、どちらかというと競技力向上に主眼をおいている。できる児童は喜び楽しみ、指導についてくる。しかし、できない児童は指導を厳しく思い、ついていけないという。B教諭の陸上運動に対するモットーは、「より速く、より遠く、より高く」というオリンピックの理想を生かして、学習指導を続けると、明言している。

G教諭： 小学校勤務20年、若い時代はスポーツ経験も多く、スポーツ好きである。しかし、40代に入って腰痛や足首痛のため、スポーツができなくなった。教室での授業はなんとか指導できるが、広い運動場での授業は、身体不調のため苦手という。陸上運動に対する認識は深いが、授業中に児童の前で実技の示範ができない。児童にとって示範のない授業は、いつも不満を残すという。とにかく無難な授業、平均的な授業をするのが、精いっぱいである。

以上、3名の教師の陸上運動に対する姿勢や認識を、事例としてとりあげたが、他の5名の教師と共通点が多い。教師の経歴や体育・スポーツ経験や関心度、体育学習指導経験、それに各教師の社会的背景、生活背景などが、大きく影響を与えていると考えられる。

2) 教師の陸上運動指導に対する評価

ところで、教師の現実の指導はどうであろうか。教師が児童一人ひとりを素直にみつめて、指導計画を立案しているのだろうか。

そこで筆者は、小学校へ教育実習へ行き、児童の授業を担当した学生に、事前に体育授業を客観的に観察させ、学習過程の具体的評価をさせた。教育実習は短期間であることや、教育実習中という特別な時期であること、また、学生は教師や児童に対して、観察評価できる能力が十分ではない。という立場から、学生の評価を全面的に信用することはできない。しかし、一応概略的に客観性が

あるとみられるので、学生の評価記録を参考資料として考察する。

彼らの学習過程の査定評価によると、教師の指導には以下のようなパターンがみられる。

① 自動制御型

授業は、授業計画説明、準備運動、指導展開、整理運動、要約評価、次時間の予定と経過し、オートマティックに授業が運ばれる。指導説明は簡潔明瞭、使う言葉が最小である。授業開始のスイッチを押せば、あとは流れるような学習過程である。教師の示範は、図表で説明したあと、立ったまま手足を動かすだけの簡単なもの、準備運動や整理運動は、児童体育委員などに形式的に示範させ、一斉に自動的に行わせる。教師は児童と同じ運動動作を一応くりかえす、しかし、受動的である。具体的にいえば、教師は必要以上に身体を動かさず、指導助言となる言葉も少ない。というタイプである。授業中児童を放任している訳ではない。しかし、授業中に教師と児童が学習を媒介として、ダイナミックに火花を散らす活気がなく、学習過程の盛りあがりがない。教師のリーダーシップや感化力が不十分であり、指導段階で要所を締める節目がない。要するに授業が平面的、受動的で、自動的に流れ作業方式で進められる。このタイプの授業は、比喩的にいえば演出不足の下手なドラマである。演出家である教師の影は薄く、しかも主役であるべき児童に主体性がない。

その事例：小学校5年の授業

F教諭は「日頃実施している授業内容で進める」という。授業内容は持久走、すでに3回実施しているので、当日は4回目である。

児童32名全員が運動場に集合、F教諭から「今日も持久走を実施します。運動場（1周約200m）を1人で6周すること」と説明がある。児童は「わーい！前回より1周多いなあ」と喜ぶものと、「わー！回るのが多くなって苦しいなあ」というものに分かれる。児童の嬉しい顔と悲しい顔が交差する。

ついで、F教諭は「身体の調子が悪い人はいませんか、いたら申しでなさい。みんな無理をしないで走る」と付け加えた。準備体操は児童体育委員2名が、隊列の前に出てラジオ体操第1を

はじめる。体操終了後ちょっと間隔をおいてスタートラインに着く、「ヨーイ、ドン」先生の号令で全員スタート、32名が同時にスタートのため、多少混乱する。走るペースや呼吸法、腕振りなどの走法などの諸注意、指導はない。また、「がんばれ、しっかり走れ」などの激励の言葉もない。

児童の話によると、持久走の最初の時間から、別に指導助言はなかったという。

児童は運動場を走り回る、F教諭はスタートライン付近に立ったまま無言である。1周、2周と周回数を児童に指示するだけ、児童は唯もくもくと走る。表情も特別に変化ない。3周目から速い児童と遅い児童に差がつきはじめる。遅い児童は肥満型の女子に目立つ。6周終了で、先頭と最後にゴールした児童の差は約2周である。全員完走後、整理体操を簡単にして授業を終了する。

以上が1時間の授業内容である。日頃から教師と児童とのコミュニケーションが十分と考えられる。しかし、この時間内で観察する限り、人間関係を結びつける教師の児童への発言や呼びかけはない。また、児童間のコミュニケーションは、ほとんど見受けなかった。まさにオートマティックタイプの授業である。

この授業を評価すると、いくつかの問題が浮きぼりになる。

i. 学習目標の説明や、前後の時間との結びつきについての説明がない。

ii. 持久走は児童にとってどんな意味があるのか説明不足である。持久走は例えば「孤独と意志、忍耐との戦い」であり、仲間と楽しく走り、競争できる教材である。体育の目標である体力づくり、運動技能づくり、人間関係づくりと、どのような関連があるのか、教師は児童にわかりやすく説明し、理解させる必要があろう。そのことは授業効果を高めるために欠かせないことではないだろうか。フォームづくり、ペースづくり、呼吸の仕方、そして自分の記録を評価させるなど、技能面での指導助言が不足している。

iii. 叱咤激励、称賛など児童の感性に影響を与える指導が欠如している。児童一人ひとりに対応する人間関係づくりや、児童の感性を高める教師のコミュニケーションは、大切であるといえる。

iv. 教師と児童がともに走る場面があってよい。教師の走る距離や、スピードはたいして問題ではない。教師が児童とともに走ることによって、感受性の強い児童に与える影響は、無言の示範であり感動である。体育授業のなかでも陸上運動の指導は、教師の身体を通しての、また、同時に心と心を通じてのスキンシップ指導が、効果を高める基本となるであろう。

② 手づくり型

小学校6年の授業参観評価の事例。G教諭は40代に入っただけのベテラン女性教師、2児を育てている。クラスには体育の指導目標、内容や年間、月間の教材、進度表が掲示板に図示してある。児童はいつでも、その進度表を見ることができる。今週の教材や進度の上には、マジックの金属板をとりつけてあるのすぐわかる。

さて、クラスは33名、欠席1名、見学2名、見学者は病状が軽いので、記録測定やライン引きなど授業運営のために手伝っているの、実質的には見学ということではない。

教材は障害走、2回目の授業という。障害走の指導は陸上運動のなかでも、むずかしい教材の一つである。しかも小学校6年は第2次性徴期に入り、身体発育が加速化現象を起こしている時期である。この時期は身心のバランスがくずれやすく、無器用になりがちである。それだけに障害走をうまくこなせる児童は、そう多くないのである。

授業はまず教師と児童全員で運動場（1周約180m）を軽く1周、ジョギング並みのウォーミングアップである。G教諭は中肥満体、お世じにも軽々しい走法ではない。しかし、児童の先頭に立って、掛声を掛けながら走っている。児童は教師の掛声を「イチニイ、イチニイ」と大声で唱和しながら、楽しく気軽に走っている。2周目はランニング体操、軽く走ったり、歩きながら陸上運動向の体操を5～6種類実施している。ランニング体操終了後、全員集合、教師はこの時間の学習目標とその内容を、具体的に説明する。前の時間の児童の評価反省に基づき、障害走のフォームづくりにはいる。教師は長さ約6mの丸ゴムひもを8本準備して、16名の児童にひばって持たせる。「ゴムひもハードル」の高さは約30cm、ハードル

間の距離は4m程度、教師は児童に「ハードルをとぶのは、リズムですから8本（台）全部とび越しましょう」と指示する。ハードルの前に児童は2列に並び、とび越し始める。往復2回走ると、いままでゴムひもを持っていた、他の半数と交代する。教師は児童全員に目を配りながら、フォームの悪い児童の個人指導する。児童間でもフォームについて、お互い注意し合っている。

児童が決められた回数だけハードルをとび越すと、教師が再び児童全員を集合させ、「ハードルは3歩か5歩でとび越す練習をしよう」と指示する。そこで教師は「私がちょっととんでみせます」といってハードルをとび越してみせる。教師の示範を児童は、目を追うように観察し拍手して喜ぶ、教師のフォームは決して上手とはいえない。しかし、児童にとっては感動ある。つぎに上手な児童2人を模範的にとび越させる。最後に「うまくとび越せない人は手をあげなさい」と教師がいうと、数人が手をあげる。手をあげた児童一人ひとりに、ハードルをとび越させる。その時教師は一人ひとりに声をかけ、指導のポイントを示す。児童への指示はフォーム動作の唯一点、一ヶ所だけである。あれも悪い、これも悪いからと同時に指導すると、児童は混乱することを経験的に認知している。児童の下手な技能を同時になおすのは、不可能に近い。ハードルの動作を具体的に分けて指導する。振り込み動作、反動動作、緩衝動作、切り換え動作、繰込み動作などである。しかし、教師が指示、指導助言するのは、例えば振り込み動作であれば、ハードルでの振り上げ脚とか、ハードル上でのディップなど個々の点である。さて、最後に往復3回程度ハードルをとび越させる。そこで整理体操、今日の評価反省と次の時間の予定を話して授業終了。「自宅でもハードルのリズムを勉強してきなさい」と宿題がだされる。

以上、手づくり型の指導は、教師が児童一人ひとりを、目に見えない魔法の糸で巧みに操っているようである。教師が児童に対して、きめのこまかい個々の動作まで目を配り、技能指導をする。一方児童のちょっとした長所をみんなの前で大声で称賛し、短所は小さな声で指導助言する。「こうすればもっと上手になる」という暖かい言葉が

児童を動かす。指導がむずかしい障害走であるだけに、実際に時間をかけ、多くの回数をとび越させ、教師が児童を思い通りに動かしている。児童は教師から強制されて動かされているという認識はまったくない。児童自らの意志で、ハードルの練習を楽しく学習している。この状況は教師のまさに、手づくりの授業といえる。

③ 放任型

第3のタイプは、小学校5年担当のD教諭の授業である。簡単にいえば児童優先、児童主体の遊びで、指導とは名ばかりの、授業時間は放任の授業である。このタイプを放任型と呼ぼう。

放任型の授業は、教師がその場にいるだけで指導がない。ひどい場合は教師がなんの指示もなく、運動場や体育館などに出てこないことがある、と児童がいっている。教師は授業について児童の意見を聞くが、あとは教材だけを与え、児童に自由勝手にさせる。まさに学習目標がなく、指導なしの授業であり、教材を有効に活用せずに、自由に遊ばせている。

D教諭のクラスは児童30名、わんぱくが多く、教師のいうことを聞かぬような、クラスの雰囲気である。

走り幅とびの授業が始まると、運動場の砂場付近に全員集合、準備運動は手足をまげのぼしただけの簡単なもの、ウォーミングアップのランニングもない。さて、砂場はスコップで掘ったあとがない。また、踏み切り用のラインも引いてない。走幅とびの指導では、砂場を掘り、石ころなどの危険物の点検と除去をする。また、踏み切りのライン引きは、指導準備の基本である。ところがD教諭は、授業前の準備といえば、測定用の巻尺を1個持参しただけである。D教諭は児童に「さあ、今日は走り幅とび、自由にとぶ練習をきなさい」と指示しただけである。「ワーとぶぞ!」と児童数名がいって、助走路を走り、自由にとびはじめる。まさに自由放任、走幅とびを一応全員が1回とんだ。そのあと児童の約半数は、砂場付近で砂遊びをしたり、2人で追っかけっこをしたり、立話をしている。教師は児童と適当に付き合い、遊び、指導場面はほとんどないといってよい。授業時間の最後の方で、教師は児童のとんだ距離の測

定をはじめた。踏み切りラインは無視、自由に踏み切り、踏み切った地点からとんだ地点までを、児童1名の手伝いで測定している。測定記録は口頭で児童に告げるだけ、ノートなどに記帳はしないのである。一方、測定方法もいかげん適当であり、誤差なんか問題にしていない。児童がとんでできた穴をうめもどすこともしない。授業終了のサイレンで流れ解散、整理体操や評価反省もしない。教師も児童も勝手に教室に帰っていった。まさに放任型の授業である。

3) 児童の陸上運動に対する認識

① 陸上運動の直観像

小学校5、6年(男女)208名の陸上運動に対する認識を明らかにしよう。

まず、陸上運動に対するインスピレーション(直観像)は、第1位にかけっこ 30%、第2位リレー20%、第3位 走り幅とび16%、第4位 持久走・マラソン、12%、第5位障害走、10%、第6位運動会とオリンピック各6%である。

この結果をみると、5、6年の学習教材が中心になっている。校内体育行事、またオリンピックや全国的マラソン大会などチャンピオンの、競技性のあるものは、意外に少ない。つぎに、陸上運動が好きだと回答したものが60%。嫌いと回答したものは25%、どちらともいえないが15%である。好きと答えた理由は、走るのが速い、走るのが楽しいが最も多く、ついで持久走が好き、リレーがおもしろいなどがあげられる。一方、嫌いな理由として、走るのが遅いが断然多く、ついで持久走が辛い、走り幅とびがうまくとべない、ハードルをとぶのが下手だからなどが目立つ。陸上運動が好きというのは、男子に多く、嫌いというのは女子に多い傾向がみられる。なお、男女ともやや肥満型と思われる児童が、陸上運動を嫌いといっている。

② 陸上運動を好きな児童の事例

陸上運動が好きという児童のなかから事例をあげよう。

5年男子のO君は、走ること、とぶことが大好きである。その原因は両親が陸上競技の選手であったことから、走ること、とぶことの楽しさ

を生来的に教わったという。具体的には、両親に小さい頃から、陸上競技大会につれられて行ったこと、テレビのスポーツ番組も自然に、陸上競技関係のものを見ることが多かったこと。また、両親と毎日のように一緒にジョギングしたことなど、家族が陸上競技に親しむ環境にあったことが要因となっている。小学校では陸上クラブに所属して、毎日はりきって練習している。教師のコーチを受けるのが楽しいといっている。

ところが、O君の学校では教師が教材に陸上運動を、あまり取り上げないので不満だという。この学級では、陸上運動が好きな児童が多いといっている。持久走の校内大会では、学年で第1位になったと喜んでいる。

陸上運動が好きな児童の事例をもう一つあげよう。

小学校6年女子Sさん、彼女は走るの、どちらかというと得意ではない。しかし、なんとなく陸上運動が好きだという。その要因は、学級の雰囲気と教師の指導性にあると思われる。具体的には、学級全体の雰囲気が体育・スポーツ好きであること、学級の児童の多くは、校内のスポーツクラブに入り、リーダーとして活躍していること、月に2回行われる持久走の会で、児童がお互に励ましあって走る雰囲気があること、などをあげている。一方、担任のA教諭の指導のよさが、児童の陸上運動に対する好意度、認識のよさに直結している。A教諭は教師としてまだ未熟な面もある。しかし、児童を引っぱっていかうとする情熱が、児童に直接伝わり、運動の上手な子、下手な子、走ることの速い子、遅い子、肥満の子など体育面でも他の学習面でも、児童間の差別をしない。学級の児童全員の長所を称賛してくれるA教諭である。Sさんが陸上運動が好きという要因は、むしろ教師が好き、教師の指導が上手であると考えられる。

③ 陸上運動が嫌いな児童の事例

陸上運動が嫌いという児童の事例をあげよう。

小学校5年男子Tさんは、スポーツが苦手であるため嫌いという。同じ苦手でも球技などのチームゲームは、下手でもあまり目立たない。しかし、陸上運動は個人種目であるため、遅い子、とべな

い子は目立つ。苦手のうえに下手であるため、コンプレックスが一層強くなるという。一方、担任の教師は、できる児童に対してばかり称賛している。できなくても努力している児童はたくさんいる。できない児童も時には称賛して欲しいといっている。また、いつも下手だとばかりいわないで、具体的にどうしたら上手になるか指導して欲しいと、希望している。苦手や下手な児童を救うような技能指導が必要であり、また、学習課程があってもいいのではないかと、Tさんはいっている。

以上、陸上運動の好きな児童、嫌いな児童の事例をとりあげたが、児童の共通認識は、教師の学習指導にあると考えられる。

教師は児童の心身の発達段階と、その特性を十分考慮して、適切な指導をしなければならない。

④ 学級差について

調査対象の8学級のうち、児童が活発で体育・スポーツ好きが多い4学級は、おのずから陸上運動に対して好意度が高く、その認識も強いようである。これらの学級は昼休みや、業間休みの時間に運動場や体育館に行き、走ったりとんだり、また、ゲームなどをして仲間と楽しんでいる。

ところで、児童の体育・スポーツ好きの学級では、教師が学習教材にとりあげた種目を、授業以外の時間に仲間と実施することが多い。陸上運動が教材となれば、その時期は当然ながら、短距離走や持久走、走り幅とび、走り高とびなどが多く実施される。

一方、季節に応じて好まれるスポーツ種目、例えば冬の持久走、春秋の運動会前後の短距離走やリレーなどがある。また、流行にともない好まれるスポーツ種目もある。例えばテレビ番組の影響でサッカーが流行しているのが、その事例である。

体育・スポーツ好きの学級は、多くの児童が、機会あるごとに複数のスポーツ種目を実施する傾向もみられる。

さて、体育・スポーツが嫌いという学級はない。しかし、スポーツを学級全体で積極的に実施しようとならない学級は2つ程みられる。その原因は学級の雰囲気が、進学のための勉強や、塾通いのためあまり疲労しては困ること。また、読書熱がさかんになれば、教室や図書室で本を読むため、ス

スポーツをしなくなることがある。

このような場合、担任教師は、学級の雰囲気をも十分察知して、運動やスポーツを適度の実施するように指導すべきであろう。

⑤ 性差について

小学校5、6年になると、児童間に身体的、精神的な性差が出現する。とくに、男子よりも女子が早熟化の傾向があり、早い児童はすでに生理（メンス）が始まっている。

体育授業は学年配当の教材により学習するが、男女によって欲求が異なる。チームゲームの球技や表現運動などでは目立たないが、陸上運動は性差が明らかな種目である。そのため短距離走や走り幅とびなどで、男女一緒に競争させると、女子が嫌う傾向がみられる。ところが、走高とびは、女子が好んで実施するゴムとびと共通点があり、意外に人気がある。走高とびでは女子の方が得意といえそうである。

性差のある短距離走は、スタート地点で男女によって距離にハンディキャップをつけ、ゴール地点ではほぼ同時に到着するように工夫するのも一方法である。また、男女混合チームでリレーをさせると、性差が目立たない。

このように教師は、児童の性差による認識の違いや、身体的及び精神的条件を考慮して、陸上運動の指導に当ることが大切である。

⑥ 学年差について

調査対象を5、6年に限定したために、その違いは大きくみられない。学年差をみるためには、低、中学年の資料と比較する必要がある、今後追求したい。

⑦ 学校差について

学校の体育・スポーツに対する取り組み方によって、児童間に差異がある。具体的には、今回の調査からみても、体育研究指定校と、そうでない学校の児童間に運動認識の差異がある。すなわち、指定校の児童の運動認識や、体育・スポーツ、実施程度が明らかに高い。その理由として、体育授業の充実度及び努力程度・スポーツクラブの充実度、体育施設用具の充実、普及度、学校体育行事の企画運営、内容充実度などが児童に大きな影響を与えている。これらの要因が児童の運動認識を

変え、体育・スポーツの実施度を高めているといえる。

5. 要約

体育授業では、学習の素材として陸上運動を取りあげる。しかし、児童にとって単なる遊戯や身体運動の延長であってはならぬ。陸上運動として、きちんと位置づけてやるのが教師の指導であり役割である。

陸上運動はできるだけ速く走れる、できるだけ長く、そして高くとべる。また、できるだけ遠く投げることができる、などの技能的価値（特性）が要求される。それだけに他のスポーツと比較して、基礎的な運動に近い。しかも、単純な運動形式であるだけに、体力的、技能的に優れていない児童は、興味、関心度が低い。このような要因を教師は認識して、児童に対する興味づけや、関心を持続させる努力が要求されよう。

一方、教師は自己の陸上運動に対する好き嫌いによって、学習内容を変えることがある。すなわち、陸上運動の認識度によって、指導目標の設定や教材の選択、技能的内容、指導方法や配当時間を変えることがある。具体的には、走運動に多くの時間をさいて指導しても、跳運動はわずかな時間で、指導を終わることがある。また、指導がむずかしい障害走は短時間で終り、持久走に長時間あてることなど、教師の陸上運動の種目による認識度、指導力によって、軽重をつける場合もみられる。そのため児童の陸上運動に対する興味や喜びを引き出せないまま学習を終了することが多いようである。

教師は児童の基礎的体力、技能の程度、教材に対する欲求度、関心度などを事前により早く察知して、学習指導計画を立案しなければならない。児童の実態や運動認識を無視して、学習指導要領の学年目標や配当通りに、形式的、受動的に学習指導する教師は、児童にとって決してよい教師ではない。

教師は陸上運動の授業をするに当り、

i. 学年や学級の標準をしっかり認識し把握す

る。 ii. 児童一人ひとりの陸上運動の体力的、技能的個性を経過的に把握し、理解し認識するよう努力する。 iii. 児童が日頃の学習で生成発展する姿勢や運動課題に取り組む学習課程をつぶさに理解し、認識しておく。 iv. 陸上運動は本格的陸上競技へ導入する初歩的段階ともいえるので、遊戯的要素を学習課程に取り入れ、遊戯のなかにある真の喜び、楽しみ、厳しさを味あわせる。 v. 走ったり跳んだり仲間と切磋琢磨するなかで、競争心を呼びおこす。 vi. 学習課程で児童のなかにとけ込み、そのなかで児童と一緒に走り、跳んだりして示範する。 vii. 児童に気付かれないように、常に児童一人ひとりを客観的に把握しその人間関係を認識しておく。 viii. もし教師自身が示範できなければ、児童を代理示範に仕立て、手足をとりながら言葉で指導する。また、スライドやビデオテレビなどを活用して指導する。

以上8項目に整理したが、要は児童の心や身体に共鳴できるような指導、児童の琴線にふれるような指導、教師と一人ひとりの児童との間に結びつく心と心のベルト（ラポート）があってこそ、りっぱな学習指導ができると考える。チームスポーツと比較して、陸上運動は単純な形式での基礎的教材である。それだけに以上述べてきた指導方法を常に考慮しながら学習課程をすすめるべきであろう。

まとめると、陸上運動の指導に当って、教師の運動認識や児童の運動認識の深さが、指導上いかに重要であるか、論じたものである。陸上運動に対す教師の深い認識を、児童に十分伝達し、指導していくことは、学習効果を高める大きな要因となろう。

参考文献

- 1) 古藤高良編 陸上競技指導ハンドブック, 大修館書店, 1975
- 2) 古藤高良 走の科学, 不昧堂出版, 1975
- 3) 金原 勇 陸上競技のコーチング, 大修館書店, 1975
- 4) 秋吉嘉範 陸上競技選手のランニング・フォー

- ムに関する研究(1), (1)福岡教育大学紀要第25号, 1976
- 5) 秋吉嘉範 陸上競技指導の基礎的研究, (1)福岡教育大学紀要第26号, 1977
- 6) 秋吉嘉範 陸上競技における規範の諸問題(その2), 福岡教育大学紀要第26号, 1977
- 7) 秋吉嘉範 陸上競技に関する研究, 全国教員養成大学の陸上競技授業内容の現況, 福岡教育大学紀要第30号, 1981
- 8) 秋吉嘉範 陸上競技選手のランニング・フォームに関する研究(1), 福岡教育大学紀要, 第32号, 1983
- 9) 秋吉嘉範 陸上競技選手のランニング・フォームに関する研究(2), 福岡教育大学紀要, 第33号, 1984
- 10) 秋吉嘉範 遊戯に関する運動学的研究, 福岡教育大学紀要第33号, 1984
- 11) 秋吉嘉範他 運動の概念, 不昧堂出版, 1984
- 12) 秋吉嘉範 陸上競技選手のランニング・フォームに関する研究(3), 福岡教育大学紀要, 第34号, 1985
- 13) 秋吉嘉範 運動の価値と認識に関する研究, 福岡教育大学紀要第34号, 1985